

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 **東洋音楽学会** **会報** 第52号

発行(社) 東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号
TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

目次

第52回大会のご案内.....1	定例研究会発表募集.....4
第52回大会の研究発表募集.....1	定例研究会報告.....5
第18回田邊尚雄賞受賞者発表.....2	会員異動.....10
第63回通常理事会議決事項のお知らせ.....2	図書・資料等の受贈.....12
学会の制度改革について.....2	新刊書籍.....12
会員名簿発行のための調査について.....3	前号の訂正とお詫び.....13
日本学術会議芸研連シンポジウムのお知らせ.....3	編集後記.....13
会員の受賞.....4	収支予算書(前号の訂正).....14
本田安次氏を偲ぶ.....4	施行細則改定案(対照表).....15
会費納入のお願い.....4	社団法人東洋音楽学会支部規程(案).....17
定例研究会開催予定.....4	社団法人東洋音楽学会常任委員会規程(案).....18

第52回大会のご案内

社団法人東洋音楽学会は2001年度の大会を、下記の通り開催いたします。どうぞ多数ご参加下さい。

- (1) 日時：2001年11月23日(金) 24日(土) 25日(日)
- (2) 会場：沖縄県立芸術大学
(〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4)
那覇空港よりタクシーで約25分、約2,200円。
- (3) 内容：(細目は変更することもあります)
テーマ：アジア音楽における受容・変容・創造
23日夜：琉球芸能鑑賞会(19:00開演予定、
中日音楽比較研究国際学術会議と共催)
24日午前：研究発表会
午後：1) 公開講演
2) 総会
3) 田邊尚雄賞授賞式
4) 懇親会(メルパルク沖縄)
25日午前・午後：研究発表とラウンドテーブル
(15:00終了予定)
- (4) 会費：
会員参加費 3,000円 学生会員は2,000円
懇親会費 5,000円 学生会員は3,000円

ご案内とお願い

- (1) 大会のプログラムは23日(金)夕方から始まりません。24日午前の研究発表会から参加する場合も、飛行機便の関係上、前日のうちに到着している必要があります。
- (2) 大会参加者のために適当と思われるホテルと航空便をいくつか用意しております。ご利用を希望される方は、下記旅行業者にお申し込みください。大会期間は連休と

重なり、那覇市内では他の大規模な学会も予定されていますので、ホテル、航空便ともに混雑が懸念されます。早めにお問い合わせくださいますようお願いいたします。

〒900-8602

那覇市松尾1-2-3 沖縄ツーリスト(株)

コンベンションイベント部 上里辰夫

電話 098-864-1271 FAX 098-869-1065

営業時間：月～土、8:30～17:30

(お問い合わせの際、東洋音楽学会会員である旨、添えてください)

第52回大会の研究発表募集

第52回大会の研究発表会における口頭発表およびラウンドテーブル企画を募集いたします。今回の大会のテーマは「アジア音楽における受容・変容・創造」ですが、研究発表の内容は、それに限定されず自由です。

研究発表申込

- (1) 発表時間：20分(厳守) 質疑応答：10分
- (2) 申込方法：題目、要旨(1200字以内)、氏名、連絡先(住所、電話、fax、e-mail address) 使用希望機器を明記の上、下記の大会事務局宛に郵送すること。なお、要旨は、フロッピーディスク(MS-DOSテキストファイル)、e-mail(添付ファイルは不可)でも受け付けるが、その場合確認のためプリントアウト原稿を郵送またはファクスで送付すること。

ラウンドテーブル申込

- (1) 発表時間：2時間(含質疑応答)

(2) 参加人数：司会、発表者を含めて4名以内
(3) 申込方法：題名、要旨(1200字以内)、代表者氏名、代表者連絡先(住所、電話、fax、e-mail address)、使用希望機器を明記の上、下記の大会事務局宛に郵送すること。なお、要旨はフロッピーディスク(MS-DOSテキストファイル)、e-mail(添付ファイルは不可)でも受け付けるが、その場合確認のためプリントアウト原稿を郵送またはファクスで送付すること。

申込締切：2001年7月13日(金)必着
採否決定：締切後、大会実行委員会で決定し、結果を申込者に通知します。

申込宛先：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町1-4
沖縄県立芸術大学附属研究所 久万田研究室気付
(社団法人)東洋音楽学会大会事務局
tel: 098-882-5044 (久万田研究室)
fax: 098-835-5711
e-mail: s-kumada@okigei.ac.jp

第18回田邊尚雄賞受賞者発表

第18回田邊尚雄賞は、以下のように決定いたしました。

[受賞者・受賞対象]

谷本一之「アイヌ絵を聴く」

(北海道大学図書刊行会 2000年6月発行)

磯水絵「説話と音楽伝承」

(和泉書院 2000年12月発行)

[選考経過]今回推薦された業績は6件、3月13日に開かれた第18回田邊尚雄賞選考委員会で慎重に審議し、上記2点を選びました。授賞式は本学会第52回大会で行われる予定です。理事会で承認された授賞理由は以下の通りです。
[授賞理由]「アイヌ絵を聴く」は、著者の約半世紀に亘るアイヌ芸能研究の大著。副題に「変容の民族音楽誌」とあるごとく、時代を追って変容するアイヌの芸能を、幕末・明治の絵画資料・文献及び明治の蝋管録音から現代に至るまでの演奏資料・映像資料を駆使して、調査・収集され、そこからアイヌ文化の本質を深く追求されている。多くの絵からはアイヌの歌がまさに聞こえて来るかのような錯覚すら覚える。長期間に亘る調査は、まさに前人未踏の業績であるとともに、その学恩は量りしれない。

一方、「説話と音楽伝承」は、今はもうほとんど消滅してしまった中古・中世の音楽を、「発心集」など多数の説話と、当時の日記資料から丹念に導き出し、その伝承形態を考察しておられる。谷本氏がフィールドワークであるのに対し、磯氏は文献による研究が中心。芸能研究において、従来、一方に偏りがちな文学研究、音楽研究の狭間を埋めるべく、25年の歳月を費やしての緻密な研究は、今後の学会に資するところが大きい。両者ともに、その研究成果は高く評価されてしかるべきである。

第63回通常理事会議決事項のお知らせ

2001年4月8日(日)13時より、東京芸術大学音楽学部大会議室において、第63回通常理事会が開催されました。そこで審議された議事と主な議決事項をお知らせいたします。

(1) 新入会員承認の件

2000年9月1日より2001年4月7日までに申し込みのあった正会員11名、学生会員8名の入会が正式に承認されました。氏名等は、会報前号および本号の「会員異動」に記載されています。

(2) 平成13年度(2001年度)研究発表大会および公開講演会の件

本号の関連記事をご覧ください。

(3) 第18回「田邊尚雄賞」受賞者決定の件

本号の関連記事をご覧ください。

(4) 第19回「田邊尚雄賞」選考委員選任の件

大貫紀子、岡崎淑子、柘植元一(以上再任)、小林貴、蒲生郷昭(以上新任)の5氏が選任されました。

(5) 長期会費滞納者処理の件

定款施行細則第4条に基づき、長期会費滞納者のうち4名を退会とみなして処理することが決まりました。また、残りの滞納者については、督促状を発送することになりました。

(6) 参事・各種委員委嘱の件

小野美紀子、高瀬澄子、二田綾子の3氏が参事として追加されました。このうち、小野美紀子氏と高瀬澄子氏は総務担当および会報編集委員として、二田綾子氏は機関誌編集委員として委嘱することになりました。制度改革に関する委員会としては「改革検討委員会」が設置されることになり、下記6氏への委員委嘱が決まりました。

改革検討委員会

塚田健一(委員長) 金城厚、櫻井哲男、田井竜一、藤田隆則、茂手木潔子

(7) 制度改革の件

本号の関連記事をご覧ください。

(8) 東洋音楽学会研究推進事業基金の件

平成12年2月以来の文部省からの指導に従い、研究推進事業基金(450万円)を設けることになりました。すなわち、「公益法人の設立許可及び指導監督基準」に基づいて、「内部留保」の水準を一事業年度における事業費、管理費及び当該法人が実施する事業に不可欠な固定資産取得費の合計額の30%にとどめなくてはならない旨の指導があり、繰越資金が多い本学会の内部留保を引き下げる対策として設立されたものです。併せて基金に関する規定も定められました。

学会の制度改革について

1. 東洋音楽学会の制度改革の問題は、平成7年の第1期制度委員会の発足以来、理事会とその後3期にわたる制度委員会において組織的、継続的に審議されてきました。本学会が会員にとって魅力あるものになるためには、今後どのような改善がなされるべきかということが、議論の出発点でした。例会や全国大会での論文発表の応募件数や参加者数、あるいは機関誌への投稿論文の件数などからも明らかなように、近年学会活動は停滞しています。このような状況を打開し、学会を活性化するためには、制度の改革のみならず学会活動のさまざまな面における改善が必要であることは言うまでもありません。これまでの審議の過程で、まず次のような制度上の問題が提起されました。

(1) 東京圏で開かれる例会が「本部例会」として中心に位置づけられ、関西・沖縄の例会は支部例会とされて

いるため、学会にとっての例会活動の意味や重要性が開催される地域によって異なる結果となっている。今後は東日本地域を支部化して、いずれの地域も学会本部に対して対等な関係で例会活動を行うことが望ましい。

(2) 例会をより魅力あるものにするために例会の企画や運営に携わる人員を増やす必要がある。そのためには、実質的に機能していない地区委員制度を廃止し、各支部の会員が支部委員を選出し、支部委員が中心となって例会活動の活性化をはかる必要がある。

(3) 学会本部の総務・経理等の通常業務をする従来の役員連絡会はその位置づけや責任体制が曖昧であるため、役員連絡会に代わって常任委員会を設置して、新たな規程のもとに本部運営を円滑に行う必要がある。

2. 本年度に新たに発足した「改革検討委員会」では、今後中・長期的に学会活性化のためのさまざまな検討を行っていきませんが、その改革の第一歩としてこれまで審議されてきた改革案の基本的な骨子を尊重し、上記の3点に関して次の制度改正を提案することと致しました。

(1) 学会本部のもとに全国を三つの支部(東日本支部、西日本支部、沖縄支部)に分け、支部委員会を組織して例会その他の学会活動の運営に当たる。

(2) 学会本部の総務・経理に関する業務は、理事の一部によって構成される常任委員会が行う。

この二つの制度改正により、本部と支部の学会事業と所轄事務は次のように区分されることとなります。

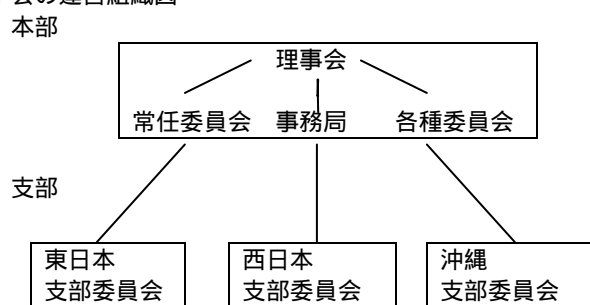
本部 事業：機関誌の刊行、研究発表大会・公開講演会の開催。

所轄事務：法人全体の総務・経理。総会・理事会・常任委員会・各種委員会の運営。

支部 事業：定例研究会(例会)、支部広報、研究プロジェクトの実施。

所轄事務：支部委員会の運営(各支部の総務・経理等)。

学会の運営組織図



3. 本制度改正に伴って生じる重要な事柄の一つに支部委員選挙があります。これは、従来通りに行われる理事の選挙時に、各支部の会員が支部の学会活動を中心に運営する委員を選挙するものです。本制度改正に伴う東洋音楽学会定款施行細則改定案(対照表)、支部規程(案)、常任委員会規程(案)が巻末に掲載されていますので、ご覧下さい。この制度改正案は、本年秋の総会に案件として提出される予定です。なお、ご意見、ご質問は学会事務局までお寄せ下さい。

(改革検討委員会委員長 塚田健一)

会員名簿発行のための調査について

本年は会員名簿発行年にあたります。新名簿は本学会の年度末(8月末)に、機関誌と同時に発行の予定です。同封の葉書に名簿記載事項をご記入の上、6月末日までに(厳守)ご投函ください。ご協力をお願いいたします。

日本学術会議芸研連シンポジウムの

お知らせ

芸研連(芸術学研究連絡委員会)では、今年度のシンポジウムを下記の通り開催いたします。みなさまのご参加をお待ちしています。

多元的共生の時代を越えて

ニュー・ミレニアム・アートへの展望

時：平成13年6月23日(土曜日) 午後1時~5時

所：立命館大学以学館1号ホール(京都市北区 堂本印象美術館前 1階566名 2階154名収容)

入場無料・申し込み不要・来聴自由

ジャンルの純粹化から一転してクロスオーバーの道をすすんだ20世紀の芸術。世紀末をくぐりぬけ、あらたなミレニアムをむかえて、芸術はどんな方向へ進もうとしているのか。また芸術研究は、どのような可能性をきりひらくだろうか。

第1部では、すでに800年以上にわたる歴史をもって、東洋・日本そしてキリスト教をクロスオーバーするかたちで独自の展開を示した「茶の湯」をとりあげ、武者小路千家家元 千宗守氏をおむかえし、「茶の湯」の思想と実践とを根底にあらたな芸術環境の創出を試みてこられた氏の活動を展望します。

第2部では、千氏のお話のもとに、若い作家・研究者たちがこれまでの芸術を新鮮な目で振り返り、今後の芸術のあり方を、批評も含めた芸術研究との関係の中で探ります。

第1部 茶の湯、その歴史と未来(1:00~2:00)

ゲスト・スピーカー：千宗守氏(武者小路千家家元)

聞き手：鷲田清一氏(大阪大学教授、臨床哲学専攻)

第2部 シンポジウム(2:15~5:00)

共生の時代を越えて

--ニュー・ミレニアム・アートへの展望---

司会：鷲田清一氏

パネリスト：

- 岡田暁生氏(神戸大学・音楽学研究者)
- 兼子正勝氏(電気通信大学、メディアコミュニケーション論)
- 千宗守氏(武者小路千家家元)
- 堤春恵氏(劇作家)
- 鶴岡真弓氏(立命館大学・西洋美術史研究者)

開会挨拶 鐸木道剛 / 閉会挨拶 神林恒道

連絡先 〒560-8532 大阪大学文学研究科美学研究室
美術学会事務局 上倉庸敬

Tel. 06-6850-5122 Fax 06-6850-5121

立命館大学 担当者 上田高弘

会員の受賞

寺田吉孝氏がヤープ・クンスト賞 (Jaap Kunst Prize) を受賞

アメリカの民族音楽学会 (Society for Ethnomusicology) が機関誌 *Ethnomusicology* に発表された論文の中から、北米以外に在住する研究者による論文を対象として毎年一件選定して授与しているヤープ・クンスト賞 (Jaap Kunst Prize) が、会員の寺田吉孝氏に授与されました。受賞の対象となった論文は、"T.N.Rajarattinam Pillai and Caste Rivalry in South Indian Classical Music" *Ethnomusicology*, 44(3) (Fall 2000) です。

野川美穂子氏が第14回清栄会奨励賞を受賞

第14回(平成12年度)清栄会奨励賞が会員の野川美穂子氏に授与されました。論文「江戸音曲の平曲受容」(軍記学研究叢書12『軍記語りと芸能』汲古書院)における三味線音楽の旋律に関する研究が評価されたことによるものです。授賞式は国立劇場事務所2階大会議室にて、平成13年4月11日に行われました。

本田安次氏を偲ぶ

民俗芸能研究で巨大な業績を挙げられた文化功労者、本田安次博士が2001年2月19日、94歳で亡くなりました。眠るような御最期であったと聞く。

先生は1906年福島県に生まれ、26年早稲田大学英文科に入学し、秋には秩父神社の神楽の見学会に参加して感銘を受ける。先輩小寺融吉と深く交流し、日本青年館の「郷土舞踊と民謡の会」の舞台裏を手伝うようになった。

英文学の師、悪魔主義の詩人日夏耿之介の影響を受け、民俗芸能にひそむ陶酔の美に魅せられ、29年に卒業し石巻中学校に赴任後は、羽織袴姿で東北地方の民俗芸能を次々と見て歩き、文献資料と伝承者の聞き書きで記録していった。34年の『陸前浜乃法印神楽』、42年の『山伏神楽・番楽』として結実した著作は、単なる民俗芸能の報告書ではない。前者の「自序」でいきなり、柳田国男と折口信夫の舞と踊りの理論を考察しているように、絶えず芸能の本質的な問題を考えていて、謎が解けたときの喜びを「なるほどと思いましたですね」とよく話された。43年の『能及狂言考』では、能専門の研究からでは見えてこぬ語り物としての能の構造を、民俗芸能研究の資料で実証的に説く。49年に早稲田に戻ったあと調査は全国に広がる。インドなどにも行き「東洋の芸能は陶酔の芸能ですね」と言われたのを、私は早稲田の大学院の講義で拝聴した。

先生は民俗芸能の資料の大成に一生を捧げ、73年には『日本の民俗芸能』全5巻を、昨年3月には8年がかりの大著『日本の伝統芸能』全20巻を完結された。先生の何よりの強みは、ノートを見ずに筆録できることで、芸能から目を離さず一部始終を見つめておられた。還暦のお祝いに毛越寺延年の『花折』を舞われたが、その稽古で私も直接振りを教えられ、先生の芸能把握の力には驚嘆させられた。

先生のもうひとつの功績は、「全国民俗芸能大会」を第1回の50年から牽引してきたことである。私は63年

から舞台監督の先生のお手伝いに加えていただき、民俗芸能に対する愛情、舞台上演に対する厳格さ、伝承者との暖かい交流関係をまのあたりに拝見できたのは何よりであった。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。合掌。

(吉川周平)

会費納入のお願い

2000年度(2000年9月1日~2001年8月31日)までの学会費を未納の方に、請求書と振替用紙を同封いたしました(同封されていない方は、納入済みです)請求書で未納金額をお確かめのうえ、早急に払い込みください。会費未納の場合、その年度の機関誌はお送りできません。

本状と行き違いに納入がありました場合は、どうかご容赦ください。

定例研究会開催予定

第440回定例研究会

2001年6月2日(土) 午後2時 - 4時30分

東京芸術大学音楽学部

1. 「平家琵琶の調弦について」

薦田治子(お茶の水女子大学)

2. 未定

第441回定例研究会

2001年7月7日(土) 午後2時 - 4時30分

上野学園日本音楽資料室

1. 「ドイツにおける雅楽の受容」(仮題)

ハインツ=ディーター・レーゼ(ケルン、日本文化会館)

2. 未定

第442回定例研究会

2001年9月1日(土) 午後2時 - 4時30分

上野学園日本音楽資料室

内容未定

定例研究会発表募集

下記の定例研究会における研究発表(口頭)を募集します。発表希望者は、発表種別(研究発表、報告等)発表題目、要旨(800字以内)発表希望日、氏名、所属機関、職名、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail等)を明記の上、学会事務局宛申し込んでください。

第440回

2001年6月2日(土) 午後2時 - 4時30分

東京芸術大学音楽学部

第441回

2001年7月7日(土) 午後2時 - 4時30分

上野学園日本音楽資料室

第442回

2001年9月1日(土) 午後2時 - 4時30分

上野学園日本音楽資料室

定例研究会報告

第435回定例研究会(2000年12月9日)
上野学園エオリアンホール
(日本音楽学会関東支部との合同例会)

研究発表

番いリズム考 皆川厚一(ガムラン演奏家)
(発表要旨)

番いリズムとは、複数の互いに異なるリズム型を組み合わせ、一つのまとまった音楽的実体を作り上げることである。

バリ島のガムラン・グング・クビヤールのガンサ・パートを例に取り、バリ音楽における番いリズムの技法であるコテカンを考察する。

骨格旋律について；西洋音楽の対位法における「定旋律」、あるいはジャズ音楽における「コード進行」に相当する音楽進行のガイドライン。

節目楽器について；楽曲の形式を明示する為の楽器群で、通常は大小数種類の銅鑼が用いられる。

装飾楽器について；骨格旋律の進行に沿って様々なリズム的装飾コテカンを行う楽器群。

コテカンkotekanの種類

1. oncang2-gan オンチャン = オンチャンガン；二つのパートの交互の番いリズム。

直線形と千鳥足形がある。

2. norot ノロツ；刺繍音型移行部分は共通音になる。

3. ngotek ウゴテツ1；継続型と移行型(継続型は対称型、移行型は同一方向型。一つ目の音をはずして二つ目の音から考える。)

*インドネシア人の拍節感...強拍はストレスを加えるポイントではなく、その拍以前に高まった音楽的緊張の解放点として認識される。

ngotek ウゴテツ2；完全五度が協和音程であること。

リズム楽器による番いリズム

candetan/kechak チャンダタン/ケチャ；番いリズムのより根本的な性格としての位相差性が顕著に確認される。

*番いリズムによる多声楽の特徴...定旋律に対して並列的に声部を増やしていく「足し算型」の音楽ではない。この意味で対位法(カウンターポイント)という用語は当てはまらない。骨格旋律の節々で共通の音に収束する縄のような音楽といえる。

講演

音律について - 作曲家の立場から 藤枝守(作曲家)
(講演要旨)

近・現代音楽の基盤となった平均律は、演奏スタイルや作曲手法、音楽教育などさまざまな音楽の実践のなかに浸透している。そして、無意識のうちに、平均律もたらす音程感や響きがわれわれの音感覚に作用している。このような平均律の絶対的な支配に対して、この音律の矛盾を明らかにしながら、あらたな音律づくりをめざしたのがハリ・パーチャル・ハリソンをはじめとするアメリカの実験的な作曲家たちであった。なぜ、パーチャルやハリソンたちは、あらたな音律を必要としたのだろうか。そこには、脱・西欧近代という強い意志がみられる。

まず、平均律という音律を正しく捉える必要がある。

そのために、バッハの「平均律ピアノ曲集」において、平均律が採用されたという誤った事実を再確認しなくてはならない。そして、19世紀における近代的な楽器の大量生産の工程が平均律を生むひとつの大きな要因であったという認識が重要だと思われる。十二音技法から始まる二十世紀音楽が平均律という枠組のなかで展開したものであり、また、その枠組を受け入れた多くの日本の作曲家たちが、箏などの伝統的な楽器に対して平均律を与えることで「現代邦楽」というジャンルを確立していったといえよう。

現在、さまざまな分野で機能合理主義を押し進めてきた近代的なシステムが破綻をきたしているといわれている。おそらく、音楽においても、平均律が生んだ功罪を捉え直し、そして、われわれの伝統が培ってきた音楽や楽器に対して「音律」というあらたな視点から見つめ直す時期にきている。僕自身、箏や笙の編成による「モノフォニー・コンソート」という合奏団を組織して、純正調などの古来の音律法を実験的に運用しながら、あらたな響きを体験する場を生みだしてきた。たしかに、「音律」という問題は、特殊で専門的なものに思えるが、しかしながら「音律」に対する意識を通じて、近代主義を越えたこれからの音楽の方向が垣間みえてくるのも事実である。

ディスカッション

世界の音律をめぐって

藤原一弘(洗足学園大学)

藤枝守(作曲家)

皆川厚一(ガムラン演奏家)

司会：茂手木潔子(上越教育大学)

(例会記録)

皆川厚一氏の発表は、演奏家および大学での実習授業の経験を踏まえて、ガムラン演奏における「番いリズム」について、時間軸にそった各楽器パートのリズム表と、映像資料を用いて明らかにしたものである。皆川氏は番いリズムをもつバリ音楽の多声的な特徴を、西洋的対位法、つまり「足し算」的音楽ではなく、むしろ「位相差性」という概念で示されるリズム上の性格によって規定される、「縄の様な」音楽として呈示している。発表は演奏者からの視点で音楽の時間構造を明示するものであり、合同例会の発表として西洋的な多声楽との対比を考える機会をも呈示するものであった。

一方、藤枝守氏の講演は、音楽における近代の中で平均律が果たした役割を批判的に検討し、そこから日本の状況でどのように新たな音律を実践するのか、という課題に直面しつつ作曲行為を営む立場での発言であった。純正調あるいは古典調律といったある種伝統的「響き」への傾聴を求める音律の実践が、近代のシステムの破綻を超越するひとつの方向性を示し、聴感覚の回復をも与えることが呈示された。作曲行為における近代の超克あるいは脱西洋近代の動きは、それぞれの伝統的音律による創作活動の可能性を示唆するものである。しかし、こうした行為がすでに西洋的な制作行為の一端に取り込まれていることも見逃せないことと思われる。

ディスカッションには藤原一弘氏が加わり、バッハ以前の鍵盤音楽を調律するという立場から、とりわけ平均律の成立を批判的に捉えた。そして演奏者の「響き」へ

の積極的、主体的な取り組みあるいは関与の問題が中心に語られた。

質疑応答等を総括すると、全体的に平均律を中心にして議論が展開したと言えよう。このことは、ガムランなり純正調なりの多様な音律の存在と同時に、音楽においても生じているグローバル化あるいは近代化をもたらす均質性があり、結局のところその均質性という標準に基づいて多様性という「種々の音律」もまた位置づけられるという感がある。(永原恵三)

第436回定例研究会(2001年2月10日)

お茶の水女子大学共通講義棟2号館102教室

研究発表

春日大社にて発見された雅楽器

秋田真吾(春日大社宝物殿学芸員)

(発表要旨)

春日大社の摂社である若宮神社からこの度、笙と和琴が撤下され、平成12年10月に一般に公表された。

発見された笙は、正倉院の笙と同様に「也」「毛」管の裏面に屏上が設けられ、各管の指孔の高さが現行のように水平でなく左上がりである点が大きな特徴である。特に両管における屏上は、正倉院所蔵の笙以外では他に類例のないものであり、古製の音律を考える上で大いに注目される。若宮創建期の記録「中臣祐房春日御社縁起注進文寫」により、保延3(1137)年に藤原忠実より奉納された可能性が極めて高く、竹管に奏痕が残ることからも製作年代は更に遡ると推測される。匏は表面の金沃懸地が平安後期の技法に相当するとの見解や演奏による手擦れ等もないことから、奉納に際して新調したものと考えられる。現在、竹管は古くても匏は近世に作り替えられたものが大半を占める中で、平安時代の作として確認できるのは貴重である。また、ほとんどの竹管に「兼信」の針書銘があった。

和琴に関しても興味深い点が確認できた。尾部は現行の櫛形突起でなく、復元の結果、正倉院の和琴に見られるような花卉形の尾部を簡略化した形になると推測される。また、磯に樹皮が残存し、原木の生育中に虫によって作られた巣穴が甲面に残っている。何か特別な事情があった原木と思われ、神木もしくは何か由緒のあった木であった可能性が高い。絃は張っていたようであるが、演奏痕がないことから奉納を目的に製作されたと思われる。『春日社記録』「中臣祐定記」の嘉禎2年(1236)の記事に本品と思われる和琴が見出されるので、これを下ることはなく、創建後暫くして奉納されたものであろう。

今回発見された笙と和琴は、正倉院から現代に至る雅楽器の歴史の空白期を埋める作例として極めて重要な発見といえよう。更に神宝という特殊な性格上、奉納時の状態が完全に残されており、後世の修理が全くない点が今後の研究にとっても極めて有益と思われる。

シンポジウム

楽器史への試み - 春日大社の和琴をめくって -

パネリスト: 秋田真吾(春日大社宝物殿学芸員)

高桑いづみ(東京国立文化財研究所)

高橋美都(京都市立芸術大学)

日本伝統音楽研究センター)

野川美穂子(東京芸術大学)

司会: 永原恵三(お茶の水女子大学)

(シンポジウムの記録)

春日若宮のご神宝として、昨年かなり変わった形態の和琴が発見された。この発見を機に他の博物館などに所蔵される和琴の調査を行い、時代を遡るかたちで形態の変遷史を試みたのがこのシンポジウムである。

まず野川美穂子が、歴博と彦根博蔵を含む楽器13点の調査をもとに、形態的特徴を説明した。幅広になる尾部、放射線状の弦、考古学的遺物と共通する尾部の突起、頭部から尾部に向かうS字状のソリ、葦津尾の使用などである。その上で、全長やソリなど、『楽家録』をはじめとする文献的記述と比較した。調査楽器の製作年代の特定は難しいが、南北朝製作とされる和琴以降、突起部分の補強方法に個体差はあるものの、上記の特徴の変化は少ない点を指摘した。

次に秋田真吾が春日大社の和琴の報告を行った。この和琴は尾部の形態が特殊で、S字状のソリもみられない。花卉形の尾部といい、なだらかなカーブを描く点といい、正倉院に所蔵される和琴に類似している。「嘉禎2(1236)年中臣祐定記」に、若宮御遷宮の奉出楽器として記載される和琴に比定できるかもしれない貴重な発見と言えよう。

続いて南北朝期に和琴の定型ができあがるまでの状況について、高桑いづみが報告した。正倉院以後、南北朝以前に製作された和琴は現存していないが、鎌倉時代に製作された「男衾三郎絵巻」や「梁塵秘抄口伝集巻十四」の記述によると花卉型風の尾部を持つ和琴があったらしい。(「口伝集巻十四」では尾部を櫛形と記しており、発表時はこれを現行と同形と解釈していた。が、発表後半円形の意味ではないかと指摘を受け、現在では春日大社に近い形態だったと考えている。)まだ和琴は定型化していなかったのである。しかし「口伝集」には和琴の起源として「弓六張を並べた形」と記述もあった。その後の和琴関連記事に必ずといってよいほど登場する「天香弓」説は、鎌倉時代に盛んになった伊勢の度会神道の著述やその影響を受けた北畠親房の著述に始まる。さまざま存在した尾部の形態が鷹の尾を意識した櫛の歯型を定型とするようになり、弓のソリを模したS字状のソリを入れるようになったのは伊勢神道の影響が強かったからではないか、と推測した。

また院政期のコトとして、鳥羽離宮跡で発掘された楽器が報告されている。尾部が柏葉型でS字状のソリもないことから和琴の古形といわれているが、形態上、和琴とは異なる点が多いので名称は不明ながら和琴とは別の楽器と結論づけた。

最後に高橋美都が正倉院の楽器について報告した。正倉院には現在8から10面の和琴が残存している(残欠の数え方によって異なる)が、尾部の形態は櫛の歯状のものから花卉型まで多様であり、寸法も一樣ではなかったことが紹介された。現在では林謙三氏が報告された日本経済新聞社刊「正倉院の楽器」とは保管蔵や名称が代わり、正倉院事務所編集・毎日新聞社刊の「正倉院宝物」のデータによる必要があることも付け加えている。

第一部の研究発表が予想外に時間を取り、限られた時間内での発表で十分に意を尽くせなかったが、今後も調査を重ねて「和琴の楽器史」への展望を開きたいと考えている。(秋田真吾・高桑いづみ・高橋美都・野川美穂子)

(コメント・質疑応答)

通常と異なり第2土曜日に行なわれたにもかかわらず、関西支部からの参加も含めて参加者が多く、式年造替に際して発見された春日大社の和琴と笙に対する会員の関心の高さを示す例会となった。

秋田氏の発表は豊富な写真、法量表、文献引用をふくむ資料を配布した上での詳細な調査報告であり、当初予定の発表時間を大幅に越えるものであった。例会後半は、シンポジウムと銘打ってあったが、むしろ野川・高橋・高桑三氏がそれぞれによる和琴の共同調査の発表で、今までほとんど手付かずの状態にあった和琴の形態の変遷史に迫ろうという意欲的な取り組みであった。前半が予定外に延びたことから、後半の発表者が落ち着いて発表できず、内容が一部割愛されたことは残念であった。機会を改めて、今回触れられなかった部分について発表されることを切に希望する。

なお、磯水絵氏とS.ネルソン氏より、笙の奉獻者を藤原忠実とすることについて質問が寄せられ、また秋田氏が考察のなかで示した十九管笙が実在しない楽器である点が指摘された。また大津山氏から和琴の琴柱の調査を今回行なったかどうかの質問があった。(薦田治子)

第437回定例研究会(2001年3月3日)
お茶の水女子大学共通講義棟2号館102教室
2000年度卒業論文発表(その1)

1 濱崎友絵(東京藝術大学)

「トルコの近代化と音楽 - ケマル・アタチュルクによる政治改革と音楽変容 -」

(発表要旨)

本論はトルコ国家を例に、近代化と音楽との関係を再考しようとするものである。

1923年にトルコ共和国を設立したアタチュルクは、オスマン文化からの訣別を掲げ、政教分離などの西洋化・近代化を推し進めた。さらに音楽分野においても、トルコ民謡と西洋音楽理論を結合させること、つまり民謡を和声化することで、新しい「国民音楽」の創造を試みた。そしてこの路線を継承したA.サイグンなど、「トルコ五人組」と称される作曲家集団を中心として、国民音楽(国楽)作品が誕生することになった。

本論では五人組の一人であるサイグン作曲の<ボズラク Bozrak>の楽曲分析をとおして国楽の理念、つまり民謡と和声の融合、トルコ文化と西洋文明の結合が実際の音楽で実現、成功していることを実証した。しかし現在のトルコで耳にする音楽は、ポピュラー音楽やトルコ古典音楽が中心であり、そこに国楽の姿はない。では、なぜ「完成された」国楽が現在「トルコ音楽」になっていないのか。その理由を筆者は三つ提示した。

1. 音楽学者H.ベディイによれば、国楽は、当初からエリート層を対象としたものであった。それは、国民の意識と大きくかけ離れており、国楽の普及にはエリートによる「国民の啓蒙」が必要とされた。2. コンサートホール演目調査や芸術総監督の言葉から、「啓蒙する側」のエリートの念頭には、現在、国楽の言葉すらないことがわかる。3. 「啓蒙される側」のトルコ民衆自身の嗜好は、八十年前からそれほど大きく変化していないと思われる。サイグンの<ボズラク>は、譜面上では国楽の理念を体現した作品と言えるが、伴奏は民俗楽器のサズでは

なくピアノで、歌はベルカント唱法でうたわれる。これをトルコの人々は「我々の音楽」と考えるであろうか。

まさにこれこそ近代化の一つの結果であり、国楽は成立をみた後、忘却のかなたに消え去ったという経緯をたどったのだ。そしてここに国是としてすすめられた国楽の創作と普及、アタチュルクの音楽改革と願いは、結実しなかったと結論づけることができるのである。

(質疑応答とコメント)

(問:増野亜子)アタチュルクの演説で、音楽を特に重視しているとして良いか、また他の美術などはどうだったのか。

(答)音楽には力を注いだ。建築・絵画は、そんなに大きな問題ではなかった。アタチュルクにとっては、トルコ民族の根源(長年の精神)である、詩・文学を新しいトルコに見合うものにする為に、音楽が大きな領域を占めた。

(問:小塩さとみ)サイグン作曲の「ボズラク」など、国が積極的に、コンサートなどで、人に普及させる活動を行なったのか。それとも創作の方に重点が置かれたか。

(答)まず、新しい音楽を作らねばならないことから、創作の方へ力が傾き、普及はその後だ。

(コメント)西洋化、近代化を推進する中で「国民音楽」あるいは「国楽」を普及させようとする政策と、その一方にある国民の意識、すなわち「我々の音楽」との乖離の状況を捉えており、この問題は音楽の個性と西洋音楽の近代的普遍性の接触という課題へと発展するものである。(永原恵三)

2 福田裕美(東京藝術大学)

「能郷の猿楽能」

(発表要旨)

昨年4月、私は芸能の継承、及び継承者をとりまく現状を理解するケーススタディーとして、能郷の猿楽能を現地調査した。現代社会における民俗芸能の継承問題を見ていくことで、民俗芸能のあり方を検証したいと考えたからである。卒業論文はその調査をもとに作成し、民俗芸能のあり方の考察という目的を前にして、二局面からの調査、「古文書や伝承によって辿りうる、発展経緯に注目した調査」と「近年の芸能の継承の変容に注目した調査」に的を絞った。時間の関係上、今回は、後者の調査のみの発表とした。

まずはじめに、芸能がその衰退期に価値を認められ、国から重要無形民俗文化財に指定されるに至った経緯を辿った。その一方で、過疎化と後継者不足により、二度にわたって門戸の拡大が図られたことにも注目し、それが伝承形態や舞台、演目等に及ぼした影響について考察した。また、昭和60年と平成12年の録音を比較することで音楽面における変化も示した。

上記の変化が近年の社会の変化と密接に関係していることから、今後も多くの変化が生じる可能性を指摘し、さらに、芸能調査の時期のかたより、地元に関心の低さも明らかにすることで、それらを、継承者をとりまく環境としてまとめた。このような環境の中で、実際の芸能の継承が継承者に任されている現状を例示し、芸能への外部からの関与の少なさを、能郷における継承の問題点として挙げた。最後に、そこから、「民俗芸能の継承を、

継承者だけでなく、その地域全体、及びそこに価値を見出した、研究者も含む、もっと包括的な問題として、捉えること」の提唱を行い、今回の調査のまとめとした。

(質疑応答とコメント)

(問 : 大津山高) これは能か。どこに価値を見出したか。

(答) 能と狂言があり、演目などは五流能とほぼ同じ。言葉は観世流が基本で、変更部分がある。謡は、地謡が一手に引き受け、シテは舞のみで、ツヨ吟・ヨワ吟が分かれていない。囃子は、聞いた感じでは流派とは関係なく、あるパターンを繰り返す、とても単純である。五流能との違いと関連性という観点に興味がある。歴史を辿ると、能郷には古文書がないが、五流能の大成時代における他の猿楽座との関連が見出せる。音楽的なこととして、律音階の使用と民謡音階の使用の融合のようなものが挙げられる。

(問 : 小野里法子) 黒川能や現行能との細かい比較はどうか。

(答) 今回はしていないが、他の芸能との比較をしたい。また古式のツヨ吟・ヨワ吟の成立過程との関連も行ないたい。

(コメント) この研究は、一地域の民俗芸能のフィールドワークではあるが、日本の様々な地域で生じている民俗芸能の保存・継承の問題へと敷衍可能である。伝承形態や文化財指定による影響、神事の位置づけ、音楽面の変化など、多様な側面についての問題が呈示されている研究と言える。(永原恵三)

3 堀江将之 (国際基督教大学)

「山田抄太郎作「あたま山」 - 伝統的長唄音楽における新しい方向性 - 」

(発表要旨)

1957年に発表された長唄「あたま山」は、NHKの片山彦三の発案による「大衆的で音楽的にも新鮮な感覚をもった邦楽」を目指した企画である「ユーモア邦楽」の一環として制作された。長唄三味線奏者山田抄太郎が、安藤鶴夫の手による歌詞に作曲したのであるが、既存長唄に見られなかった新しい要素を盛り込みつつも、あくまで長唄という伝統の範疇に留まっていたものであった。本発表では、「あたま山」における新鮮さと大衆性に重点を置いて検証する。

第一に「あたま山」における新しさを考察する。まず題材であるが、そもそも落語に取材した長唄自体がこれ以前には残されていない。また長唄で男女の心中を直接的に表現するとことも画期的である。さらに曲中の「よいとん節」と呼ばれる箇所では、唄方や鳴物奏者が手拍子を叩き、唄は故意に音を外すという演出がなされている。またオトシや段切という、古典長唄には欠かせない部位が一切出てこないということも特徴である。

また山田は大衆性を意識したと思われる作曲をしている。終結部では「ブクブクブクナンマイダ」という歌詞をわらべ唄のような単純な旋律で繰り返す。前弾には「喜撰」の合の手引用が見られるが、ト音をイ音に置き換えて民謡テトラコードを形成するようにしている。さらに山田は、これまで二上りにおいてのみ散見された嬰へ音を本調子や三下りといった調弦においても採用した。従って「あたま山」の旋律は民謡テトラコードを多

く含有するという効果があることが明らかとなった。

「あたま山」は、これらの要素によって長唄の範疇から逸脱することなく、片山が提唱した「大衆的で音楽的にも新鮮な感覚をもった邦楽」を具現化しており、現代における長唄の創作を考える上でも重要な作品であるといえよう。

(質疑応答とコメント)

(感想 : 金井豊平) 演奏をした者として、山田先生の曲は演奏者にとり、とても丁寧な「つくり」になっている。若い人がこのように長唄を研究してくれるのは、本当にうれしい。

(問 : 柿木吾郎) 興味のきっかけは何か。また、どの程度、古典に親しんでいるのか。この対象曲は、新しい長唄の「つくり」のモデルか、単発のものか。

(答) 大学入学後サークルで始め、主に古典曲の三味線を実践している。特に考えず、単発のものとして認識した。

(コメント) この研究は、伝統的な長唄の土壌を生かしながら大衆に目を向けた作品としての「あたま山」がもつ、いわば企てとも言うべき手法を分析的に呈示するものであり、伝統音楽や芸能が切り開いてゆく方向性のひとつを明らかにしており、伝統と創作の問題に取り組んだものと言えよう。(永原恵三)

2000年度修士論文発表 (その1)

1 安齋和佳子 (上越教育大学)

「フローレス島における複管竹笛フォイ・ドアの楽器誌」(発表要旨)

本論の目的は、インドネシア東部、フローレス島の複管竹笛フォイ・ドアfoi doaの「楽器誌」を描き、楽器とそれを取り巻く背景にあるものがどのように関わり合っているのかを探ることにある。本論ではガダ県ガダ地方ヴォゴ村における2000年の調査結果に基づき、フォイ・ドアに関するあらゆる事柄について記していくという意識から「楽器誌」という用語を採用している。

本論は、以下の3つの視点から構成される。(1)竹の種類とその多様な利用法: ガダ地方に住む人々は、豊富な資材である竹を巧みに利用して生活している。多様な利用を確認することができ、竹と人が密接な関係にあることがわかる。その利用例の一つに楽器としての利用も見られる。(2)フォイ・ドアの楽器学的側面: イラと呼ばれる程の細い竹を素材とする。長さ約23cm、直径約1.5cmの竹製縦笛を左右に2本並べて固定した楽器で、1つの楽器で二重の音を発する。発音機構はリコーダーのそれに類似しており、左右の管は共に前に3孔ずつ指孔があり後には指孔がない。その他、制作過程、楽器の制作者、音階、楽器の分布、シンボリズムを取り上げた。(3)フォイ・ドアの音楽的側面: 演奏技巧、演奏状況、音楽のレパートリー、演奏形態、近年の変容を取り上げた。さらにこのようなユニークな楽器が存在する理由として、ガダの音楽に見る多声性とフォイ・ドアの関わりに着目し考察を試みた。

ガダでは伝統的に多声部からなる様々なコーラスが歌われており、人々にとって多声音楽は親しみ深い。本来1本管だったといわれる竹笛にハーモニーを求めて改良し、フォイ・ドアのような楽器を作り出したとしても不

思議ではない。近年、フォイ・ドアを取り巻く背景は変化を見せており、それに伴ってフォイ・ドアの演奏の様相が変容してゆくことは必至であろう。

(質疑応答とコメント)

(問:小野里法子)指使いなどの習得の伝統はあるのか。

(答)伝統は楽器の制作に関してもなく、見よう見真似である。伝承が廃れてきたので、指使いを新しい教え方で示す図表が生まれている。

(問:北岡朱美)フォイ・ドアにまつわる話はどこから聞いたのか。

(答)ヴォゴ村のインフォーマントから調査した。

(コメント)現地調査の結果に基づく発表で、発表者自身が習得したフォイ・ドアの演奏もまじえて、具体的な報告であった。フォイ・ドアというひとつの楽器を様々な側面から記述すること、すなわち「楽器誌」の試みであり、そこからコンテクストとしての文化的背景とその変容へとアプローチできる可能性を示唆するものであった。(永原恵三)

2 遠藤花織(上越教育大学)

「《黒川さんさ踊り》の研究」

(発表要旨)

本研究の目的は、岩手県盛岡市黒川地区に伝わる黒川さんさ踊りに焦点を当て、さんさ踊り本来の芸能の姿を浮き彫りにすると共に、周囲からの影響による変化を明らかにすることである。黒川さんさ踊りは、輪踊りを基本とする芸能で、伝承は昭和初期に一度途絶えたが、昭和43年に復活し現在に至っている。演目は複数存在したと言われ、現在は19演目が確認されている。その演目を適宜選択し、メドレー形式で踊る。演目の構成は事前に打ち合わせせず、その都度、太鼓のリーダー「一番太鼓」が臨機応変に決める。したがって次の演目は、演目の冒頭 教え太鼓 によって、太鼓の演奏と道化役「一八(イッパチ)」の踊りで踊り手に伝達される。この方法は門付けを中心としていたこの芸能が生みだした構成方法と考えられ、教え太鼓には「演目の構成段階での即興性」が認められた。また、一番太鼓の役割には、各演目の繰り返しの回数を、踊り手の疲労度などの状況により伸縮する「演目の演奏時間の伸縮における即興性」も認められた。しかし現在では踊りの場が門付けから舞台上演やイベント会場へと変化したため、演目構成の打ち合わせを事前に持つようになった。その結果、演目の構成は既知の情報となり、このことが 教え太鼓「一番太鼓」「一八」の役割を変化させ、「演目の構成段階における即興性」を消失させていた。また、時間の制約がある舞台上演では、踊り手を基準とした上演時間の構成から、上演時間の制約を中心とした演目の構成をするようになった。これは「演目の演奏時間の伸縮における即興性」の消失と考えられた。このように、踊りの場の変化は、黒川さんさ踊りの特徴である 教え太鼓「一番太鼓」「一八」の役割の変化と、演目の持つ即興性の消失をもたらしていることが明らかになった。

(質疑応答とコメント)

(問:柿木吾郎)中部から山の方に「さんさか踊り」があり、そこでは、踊る前に口上があるが、伝統的なヴァー

ジョンの「黒川さんさ踊り」にはあるか。

(答)口上はない。花ぶれ口上、つまりいただいた祝儀を披露する口上のみ。

(問:柿木吾郎)放浪の芸能者の伝承はあるか。

(答)とくにそういった伝承は確認できていない。

(問:三橋はるな)どういう点で調査対象の保存会を決めたのか。

(答)盛岡市内にあるさんさ踊りの約80団体から、舞台上で輪踊りの形態を崩していなかった黒川さんさ踊りの保存会を、一つの対象として選択した。

(問:三橋はるな)門付けや舞台上演に関する現地の人々の意識はどうか。

(答)門付けは交通事情で不可能だが本当はしたい、とのこと。舞台上演での意識の変化については現地の人々は気づいていない。論文での分析に対して否定はしなかった。

(コメント)現代の都市における民俗芸能のあり方について、盛岡市のさんさ踊りを例に、その本来的な姿の継承と変化の問題を取り上げた研究である。とりわけ舞台上演と即興性の消失に関しては、他の地域の芸能が直面する問題でもあり、そうした側面に対する担い手の人々の意識変化に関しては保存との関わりで学術研究の課題となろう。(永原恵三)

3 荻野美智江(上越教育大学)

「綾子舞 常陸踊 における囃子の役割 - 踊りと囃子の関連に焦点を当てて -」

(発表要旨)

本研究の目的は、綾子舞小歌踊の囃子の分析を通し、囃子を構成する要素と踊りの動作にどのような関わりがあるかを明らかにすること、囃子の役割を考察することにある。本研究では研究の対象を、新潟県柏崎市大字女谷(おなだに)の下野(しもの)・高原田(たかんだ)集落に伝承されている小歌踊の中で唯一共通の演目である<常陸踊>とした。

研究の結果、まず囃子の音楽としての特徴では、踊りの三段構成である出羽・本歌・入羽における囃子の構成方法、場面に応じた囃子(歌・楽器)の編成、「さし」や「後歌」と呼ばれる部分の歌を謡風に歌う点、が両集落に共通であった。次に踊りと囃子との関連では、足の動きと笛の旋律・太鼓のリズム、扇の手と歌の旋律、

踊りの動作のテンポと囃子詞、の間にそれぞれ密接な関連があることも両集落に共通であった。では囃子詞を、かけ声的な囃子詞(「ヤー」「ハア」「イヤ」など)、旋律的な囃子詞(「ファーラン」「ホーロ」「チョウヤニアン」)、特殊な囃子詞(「ヤーハン」「アーハン」など)の三種類に分類した結果、それぞれの囃子詞が踊りの「扇の手」の扱いと密接な関連がある点を指摘できた。特に、かけ声的な囃子詞は踊りの動作のテンポを決定し、踊りにメリハリを与える役割をもっている点で重要な囃子詞であるといえた。また「ファーラン」「ホーロ」と「あおり扇」「チョウヤニアン」と「千鳥扇」など旋律的な囃子詞は「扇の手」と一体化している点、「ヤーハン」「アーハン」などの特殊な囃子詞は、「特殊な扇の手や動き」を伴う点も明らかとなった。

以上の共通点から、囃子の役割には、踊りの動作のメリハリを音や声によって表現する役割、囃子の楽器編成

を場面によって変化させ、場面の特徴をより効果的に表現する役割がある、という結論に至った。

(質疑応答とコメント)

(問：小野里法子) 能のサシや三ツ地拍子との関連はどうか。

(答) 能を専門的に知らないで、よく分からない。

(問：三橋はるな) 掛け声的な囃子詞が踊りに変化を与えることは、他の芸能にはあるのかどうか。また、歌舞伎との関連はどうか。

(答) 他の芸能については分からないが、ここでは踊りに影響がある点で重要であることを認識した。また、歌舞伎との関連というよりは、現地では能との関わりが伝えられる。

(コメント) 資料として発表者による採譜に基づく囃子の構成および踊りとの関連例が示された。舞踊という身体動作と、それに対応する音響としての囃子あるいは囃子詞との関係を、丹念に記録することによって明らかにするという地道な研究であり、動作分析と音響あるいは言語分析の相互協力による研究発展の望まれる分野でもある。(永原恵三)

4 川口明子(上越教育大学)

「ガムランの学習過程にみられる口頭性の変容」

(発表要旨)

口頭伝承を本来としてきたガムランの伝承にも近年変化が生じており、インドネシアでも芸術高校・大学での楽譜を用いた教育や、ラジオ放送や市販のカセットを手本とした独習などが顕著にみられるようになってきた。日本ではガムランを「口頭伝承による音楽のモデル」として捉える傾向が強いが、その上で実際には楽譜や録音の扱いが様々に模索されている。本研究は、こうした変化を「口頭性の変容」と捉え、ガムランの学習過程を口頭性oralityと書記性literacyの観点から分析し、口頭性の変容の意味を問うことを目的とした。研究に当たり、楽譜の使用と拒絶 第二次口頭性の台頭 作品化と記譜化 「録音・採譜・分析・演奏」という過程の是非の4点を考察の視点として設定し、インドネシアと日本のガムラン学習を対象に、両者の影響関係も視野に入れ分析・考察した。

インドネシアのガムランにおいては、現在二種の学習形態がみられる。スニマン・アラム「自然の芸術家」と呼ばれる伝統的な音楽家たちは、口頭伝承を母体としつつも、楽譜という書記性をほとんど介在させることなく、ラジオ放送や「カセット伝承」に代表される第二次口頭的な伝承をも身につけてきた。これに対し、芸術教育機関での教育は、記譜法の導入や用語の体系化等により書記性を強化することで、結果的に伝統音楽教育の大衆化を招いた。一方、日本人学習者の多くは、楽譜文化で培われた自らの書記性をそぎ落としながら、録音という第二次口頭性によるメディアを武器に、ガムランの口頭性への憧憬と回帰へ至る道を辿った。この三者の変容過程は、相互に深く関連・影響しあっており、ポスト植民地主義の叫ばれる今、三者のさらなる「対話」が求められている。

(質疑応答とコメント)

(問：井上貴子) 現地での本来の口頭性と日本の第2次口頭性を比較するとどうか。また、演奏の固定化はどうか。

(答) インドネシアでも第2次口頭性は生きている。違うのはインドネシアではいつも録音するわけではないが、日本では、ほとんどの人が録音機を使うことだ。インドネシアの教育機関で楽譜が使われるのとある意味で同じ役割を、日本では楽譜を使わない分、録音機がその役割を果たしている。演奏の固定化などは、日本でもすでに見られる現象だ。

(感想：瀬戸宏) 20年間バリのガムランを習い、日本の愛好家の学習の仕方が変化している。始めた頃は、音楽学専攻の学生が中心で楽譜や録音機に気を配ったが、現状では、音楽大学以外でガムランに接する機会を得る人が出て、五線譜や録音機の使用に対して無批判な人が増加している。層は広がったが、西洋音楽と同じように練習するものと考えている人が増えてきた。

(答) 同じ危惧を抱いている。応用音楽学的態度として、フィールド・ワークの倫理と学習のマナーに関して、まとめる時期が来ているようだ。

(コメント) ガムランが日本においても教育機関のみならず一般の音楽体験の場で、音楽学習の対象とされるようになってきている現在、当時のあるいは現地の学習の方法や目的から変化している状況があるという重い現実の中、口頭性という観点で我々が様々な音楽とどのように接してゆくのかが、再考を促される総括的発表であった。

(永原恵三)

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

(2000年12月～2001年3月、訂正箇所は下線部)

- 『MLAJ Newsletter』vol.21 No.3 音楽図書館協議会
『研究紀要』XXI エリザベト音楽大学
『民俗芸能研究』第31号 民俗芸能学会
『楽聖たちの肖像 インド音楽史を彩る11人』
V.ラーガヴァン編著 井上貴子・田中多佳子訳
穂高書店

新刊書籍

- 『Traditional Japanese Music and Musical Instruments』
William P.Malm,
講談社インターナショナル、CD付き¥5,000
『アジアの仮面 神々と人間のあいだ』廣田律子編、
大修館書店、¥1,900 (あじあブックス026)
『いまの音むかしの音』遠山一行著、講談社、¥2,400
『癒しのうた マレーシア熱帯雨林にひびく音と身体』
マリナ＝ローズマン著、山田陽一共訳、昭和堂、¥3,200
『越中魚津の民謡 魚津せり込み蝶六保存会創立50周年記念』魚津せり込み蝶六保存会
『語り物文学の表現構造 軍記物語・幸若舞・古浄瑠璃を通じて』村上学著、風間書房、¥17,000
『歌舞伎 Kabuki today』大倉舜二写真、
講談社インターナショナル、¥5,800
『歌舞伎漫筆』山川静夫著、岩波書店、¥1,900
『歌舞能の確立と展開』三宅晶子著、ペリかん社、¥8,600
『古代の神社と祭り』三宅和朗著、吉川弘文館、¥1,700
(歴史文化ライブラリー111)
『最後の瞽女 小林ハルの人生』桐生清次著、文芸社
『サウンド・エシックス これからの「音楽文化論」入門』小沼純一著、平凡社、¥760 (平凡社新書065)
『庄内の祭りと年中行事』無明舎出版編、
無明舎出版、¥1,905
『スクラッチノイズ 明治・大正』柳澤眞一著、
文芸社、¥1,300
『茶能歳時記 茶と幽玄の出会い』筒井紘一著、
淡交社、¥3,200
『中世劇文学の研究 能と幸若舞』小林健二著、
三弥井書店、¥15,000
『ちよんがれ選集』福光ちよんがれ保存会編、
福光ちよんがれ保存会
『津軽の獅子舞・獅子踊』松下清子著、北方新社、¥1,600
『伝統芸能を知る本 読書案内』日外アソシエーツ編集、
日外アソシエーツ、¥7,400
『名古屋平曲とその復元 近藤正尚遺稿集』
中村正巳監修、平曲伝承会、3冊 ¥10,000
『二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容 2
映像文化』ドメス出版、¥6,100
『能 現在の芸術のために』土屋恵一郎著、
岩波書店、¥800
『能って、何?』松岡心平編、新書館、¥1,800
『花祭りのむら』須藤功文・写真、福音館書店、¥1,600
『肥後の琵琶師 近世から近代への変遷』安田宗生著、
三弥井書店
『日田祇園囃子保存会三十周年記念誌』
日田祇園囃子保存会記念誌編集委員会編、
日田祇園囃子保存会記念誌編集委員会

住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡
ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用
はがき、またはファクス、E-mail 等でも結構です)

改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添
えください。(複数表記される場合、どちらを主な表
記にするのか等)

事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等
がある場合には、明記してください。

図書・資料等の受贈

(2000年12月～2001年3月、到着順)
は寄贈者(発行者と同一の場合は省略)

- 『ぎふ民俗音楽』特別号I、第51号 岐阜県民俗音楽学会
『日本音楽学会関東支部通信』第54,55号 日本音楽学会
『楽道』12,1,2,3月号 正派邦楽会
『東方學會報』No.79 東方学会
『浜松市楽器博物館だより』No.22 浜松市楽器博物館
『日本語音韻音調史の研究』金田一春彦著 吉川弘文館
『地域研究論集』Vol.3 No.2
国立民族学博物館地域研究企画交流センター
『白い国の詩』12,1,2,3月号 東北電力(株)地域交流部
『月刊みんぱく』12,1,2,3月号 国立民族学博物館
『国立民族学博物館国内資料調査委員会調査報告集20』
(CD-ROM) 国立民族学博物館情報管理施設

- 『琵琶盲僧永田法順 現代に響く四絃の譜』川野楠己著、
日本放送出版協会、¥1,600
- 『ふくしまの祭りと民俗芸能』懸田弘訓著、
歴史春秋出版、¥1,200
- 『ぶらり東海道五十三次芸能ばなし』児玉信著、
アートダイジェスト、¥1,800
- 『祭りの音楽 音の原風景を訪ねて』山内忠著、
現代図書、¥1,667
- 『宮崎の神楽 祈りの原質・その伝承と継承』
山口保明著、鉾脈社、¥1,900 (みやざき文庫2)
- 『夢みるちから スーパー歌舞伎という未来』
市川猿之助著、春秋社、¥1,800
- 『ロシア民族音楽物語』ポポノフ著、新読書社、¥2,000
- 『忘れられた神の文化「銅鐸と歌垣」「ことば」で探
る古代日本』山口五郎著、近代文芸社、¥1,400

前号の訂正とお詫び

前号に下記の誤りがありました。心より、お詫び申し上げます。

1頁「目次」の2行目に「会長就任のご挨拶 5」を入れてください。また、同じく「目次」7行目の「定例研究会開催委予定」を「定例研究会開催予定」に訂正してください。

18頁の「(9)音楽文献目録委員会への参加」(【添付書類6】)に続く文を、「会員高桑いづみ氏、梅田英春氏、蒲生郷昭氏(以上3名 2002.3.31.まで)を委員として派遣」に訂正してください。

24頁【添付書類7】に、誤って「収支計算書」が掲載されています。正しい「収支予算書」を次頁に掲載いたします。

編集後記

本学会に多大な功績を残されました本田安次氏のご逝去されました。氏の教えを受けた多くの会員を代表して追悼のことばを吉川周平さんをお願いしました。ご冥福を心よりお祈りいたします。

会員名簿の改訂の時期となり、名簿発行のための調査にご協力をお願いを掲載しました。ご協力をどうぞよろしくお祈りいたします。

本号より参事の小野美紀子さん、高瀬澄子さんが会報編集委員会に加わりました。どうぞよろしくお祈りいたします。

次号は、第52回大会案内などを中心とした内容で9月10日頃に発行する予定です。

会報編集委員会

理事：加藤富美子、野川美穂子

参事：太田暁子、小塩さとみ、小野美紀子、北岡朱実、
高瀬澄子、竹内有一、福田千絵、前島美保、前原
恵美、増野亜子、松村智郁子、三上康子